読む・知る・つながる大体大マガジン

OUHS JOURNAL

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

Vol.235 2025.4.1

〈旬な大体大生〉
テニス部女子新2年
岡村 凜那さん
OKAMURA RINNA

〈巻頭特集〉
新学長インタビュー

大体大

大阪体育大学
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

新入生の皆さんへ

挑戦を楽しみ、自分の道を切り拓こう

学校法人浪商学園
理事長　野田 賢治

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。学園を代表して心よりお喜び申し上げます。

大阪体育大学は、学校法人浪商学園が設置する教育機関の１つです。浪商学園は1921（大正10）年に創立され、2021年、創立100周年を迎えました。学園の建学の精神は「不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」。この建学の精神を体現できる人材の育成を目指しています。

学園は創立以来スポーツ活動を奨励してきました。浪商高校第２代校長、野田三郎（大阪体育大学初代学長）は「スポーツを通した青少年の健全育成」の理念の下、野球を筆頭に運動部活動を積極的に支援しました。その強い思いが大阪体育大学開学へ結びつきました。

大阪体育大学は、東京オリンピック開催の翌年1965（昭和40）年に開学し、今年、創立60周年を迎えます。開学にあたり、東京オリンピック選手強化対策本部長と選手団長を務められた後に日本人初のオリンピック平和賞を受賞された大島鎌吉先生(1932年ロサンゼルスオリンピック陸上三段跳銅メダル獲得)を副学長として、またオリンピックスポーツ科学委員で、後に日本体育学会会長に就任された加藤橘夫先生を学部長としてお迎えしました。

西日本初の体育・スポーツの専門大学として、体育・スポーツを通して０歳から100歳までの健康を維持することを標榜し、産業体育・社会体育・学校体育の３コース制で教育をスタートしました。当時、この分野で最先端におられた大島、加藤両先生の思いが、本学の教育の原点です。50年以上経過した今も色あせることなく、脈々と受け継がれています。

昨年のパリオリンピックでは、多くの若い日本人選手が世界の舞台で輝かしい成果を収めました。18歳の松下知之選手は水泳男子400m個人メドレーで銀メダルを獲得し、その成長と挑戦が大きな話題となりました。また、14歳の吉沢恋選手はスケートボードのストリート種目で金メダルを獲得し、その若さと情熱で世界を驚かせました。さらに、北口榛花選手は女子やり投げで日本初の金メダルを獲得し、その努力と決意が称賛されました。彼らは目標に向かって挑戦し続け、世界の舞台で夢を叶えました。

そして、もう一つ、皆さんが迎える未来に大きな希望を与えるイベントがあります。それが、2025年に開催される大阪・関西万博です。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに掲げ、世界中から最先端の技術や文化が集まり、新しい時代の可能性が示されます。AIやバイオテクノロジー、宇宙開発など、これからの社会を大きく変える分野が一堂に会するこの万博は、皆さんにとっても新たな学びや刺激を得る絶好の機会となるでしょう。

大学は、自らの可能性を広げ、多様な経験を積む場です。新しい仲間との出会い、未知の分野への挑戦、そして自分自身の成長を実感する瞬間が待っています。パリ五輪で活躍した選手たちのように、大阪万博が示す未来の可能性のように、皆さんも失敗を恐れず、挑戦を楽しみ、自分の道を切り拓いてください。新入生の皆さんが、充実した学生生活を送られることを願ってあいさつとします。

人づくりの大学、皆さんが主役です

大阪体育大学
学　長　神﨑 浩

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから大阪体育大学の一員として充実した日々を送られることを期待しています。

本学は1965年の創立から今年で60年の節目の年を迎えることになります。これまで1992年には関西の体育系大学として初めて大学院を立ち上げ、2015年には教育学部を開設するなど、学術、スポーツ、教員養成などの分野で多くの人材を輩出してきました。それらの卒業生は各方面で素晴らしい活躍をしています。まさに大阪体育大学のブランド力はこの力であると言っても過言ではありません。これからは皆さん自身が本学の新たな伝統を築いていくことになります。

大学は自らが意欲的に学ぶところです。高校の「生徒」から大学の「学生」への立場の変化は、この自立性にあります。これまでとは少し違った取り組みの中で、広く、深く学びを展開し、新たな自分を創造してもらうことを願っています。これからの社会は科学技術の目まぐるしい進歩の中で、それを用いる能力を身に付けることでスポーツ、教育、産業などの分野で成果を上げることが期待されます。ぜひその先進的なものを学び、極めていただきたいと考えています。また一方で、学校やスポーツにおける指導力は、素晴らしい技能を持つ専門家の手法を知り、体験することでしか身に付けることはできません。この人から人への学びの構造をないがしろにはできません。本学の専門性の高い教員との授業をはじめクラブや学外での活動等を通じて、皆さんは将来にとってかけがえのないものを身に付けることができることでしょう。

これから先の時代、様々な社会的な課題、それはスポーツの場面であったり、仕事の上でのことであったりしますが、その課題を解決する能力が人の価値として評価されます。具体的には人とコミュニケーションを取る能力、アイデアを創出する能力、協力して問題を処理する能力などです。本学の教育の特徴はまさにこれらの能力を養成するため人と人の結びつきを大切にした教育、ハンドメイドの教育を実践しています。皆さん自身が日々の成長を実感しながら満足した大学生活を送ることができるように、私たち教職員は学生の皆さんの成長を願いつつ支援していきます。

限られた時間を有効に用い、主役になって充実した大学生活となるよう努力してください。

スターゲイトホテル関西エアポートで行われた修了式・卒業式

修了式・卒業式を挙行

6年ぶりに学歌斉唱

式典に参加した修了生・卒業生

原田宗彦学長から学位記・卒業証書が授与された

令和6年度の第32回大学院修了式・第57回体育学部・第7回教育学部卒業式が3月18日、大阪府泉佐野市のスターゲイトホテル関西エアポートで行われた。

修了生・卒業生は、大学院生は博士前期課程21名、博士後期課程1名、学部生は体育学部481名、教育学部131名で合わせて634名。

原田宗彦学長が博士後期課程の1名や博士前期課程と各コース代表の学生に学位記・卒業証書を授与し、スポーツで優れた成績を収めた大島鎌吉賞、学業で優れた成績を収めた加藤橘夫賞などの67名を表彰した。

原田学長は式辞に臨み、「今、世界はかつてない変革の時を迎えています。生成AIに代表されるテクノロジーの進化は、人類の在り方を根底から変え、地政学的な緊張は国際秩序の不確実性を高めていますが、歴史を振り返れば、こうした試練の時こそ新たな創造が生まれる契機となります。大阪体育大学の卒業生に求められるのは、変化を嘆くのではなく、それを超え、新たな時代を切り拓く勇気です」とあいさつした。

祝辞、記念品贈呈などの後、在学生を代表して学友会会長の大西優矢さん（体育学部3年、貝塚南）が送辞を述べ、謝辞は、大学院総代・端岡里紗さん、体育学部総代・舟橋輝さん（摂津）、教育学部総代・原本駿さん（西京）が務めた。

また、学歌は新型コロナウイルスの感染防止対策として、これまでは静かに聴く「清聴」だったが、6年ぶりに、本来の「斉唱」に戻った。

また、修了式・卒業式の後は、伝達式が各コースなどに分かれて実施され、修了生・卒業生は一人ひとりゼミの指導教員らから学位記・卒業証書を授与された。

伝達式の後は、謝恩会が立食形式で開かれた。

【大島鎌吉賞】14名
冨部柚三子（大学院スポーツ科学研究科）＝2022年アジア競技大会セーリング競技ILCA 6級7位、石川空、濵口まお、吉野珊珠、中村理乃、福井すみれ、坪井詩、西田瑞歩（ハンドボール部女子）＝インカレ優勝、内田峻介（アダプテッド・スポーツ部）＝2024年パリパラリンピック・ボッチャ出場、白石美優（硬式野球部女子）＝2024年 WBSC女子野球 W杯優勝、宇津木美都（水上競技部女子）＝パリパラリンピック 100m平泳ぎSB85位、田部壮一郎（体操競技部男子）＝2022年 FIG種目別チャレンジカップ・ソンバトヘイ大会男子つり輪3位、荒瀬廉（ハンドボール部男子）＝2024年男子世界選手権出場、北谷宏人（陸上競技部）＝2022年デフリンピック男子棒高跳び金メダル

【加藤橘夫賞】1名
藤浪大輔（体育学部スポーツ教育学科）＝学業成績全学1位

【博士後期課程修了者】1名
伊藤和寛　（敬称略）

contents

01 ごあいさつ
新入生の皆さんへ
02 修了式・卒業式
03 巻頭特集
神﨑浩新学長インタビュー
05 NEWS
1 OUHSスポーツキャンプ
2 旬な大体大生
3 キャリアフェスタ
07 大体大PEOPLE
望月美佐緒・ルネサンス新社長
09 NEWS
4 就職状況
5 教員採用試験合格者
6 入試合格者
7 アナリスト養成講座
8 学長特別表彰
9 大島鎌吉スポーツ賞
10 教育講演会
11 ICT部活動指導報告会
12 沖縄スポーツ展示会に出展
13 学生“夢”プロジェクト
13 コラム　窓
14 コラム　ボーシャー

「智・徳・体」を備えた人材育成を目指す

大阪体育大学の第10代学長に、神﨑浩副学長が４月１日付けで就任した。

神﨑氏は１９８５年、大阪体育大学に助手として赴任して以来、40年にわたって在籍。教授、体育学部長、副学長として、また剣道部の監督、総監督として、今年60周年を迎える本学の３分の２の歴史を歩んできた。神﨑新学長に抱負を聞いた。

■第10代の学長に就任した感想をお聞かせください。

私は40年大阪体育大学に勤め、これまでの９名の学長のうち、第２代の加藤橘夫学長から第９代の原田宗彦学長まで８名の学長に仕えてきました。いずれも錚々たる方ばかりで、特に加藤学長は日本体育学会の会長も務められ、東京オリンピック選手強化対策本部長を務めた大島鎌吉初代副学長とともに本学の礎を築かれた方。特に大学での研究活動を重視された方で、私たち若い教員に「研究はしっかりやっているかね」と声をかけられていた姿を思い出します。私が学長になり、どれぐらいのことができるか不安な気持ちもありますが、卒業生や教職員の期待に全身全霊で応えていきたいと思っています。

■新学長として最も力を入れることは何でしょうか。

少子化が進み大学にとって厳しい時代の中でやるべきことは数多くありますが、入学した学生が４年間満足し、本学に誇りを持って卒業していく環境をさらに整備することを重視したいと思っています。本学の学生はクラブ、スポーツ活動などを通じ、柔軟性やコミュニケーション能力など社会に出て必要な資質を身に付けている点が長所です。専門的な学びを通してさらに成長し、社会に出て活躍する人材に育ってもらいたい。また、本学の学生は総合的な満足度を尋ねる卒業時のアンケート調査で96％以上が「満足している」と回答しています。その背景として、教員と学生の距離の近さやクラブ、ゼミの垣根を超えた交流があると思いますが、さらに満足度を高めるために、教員、職員に加えて学生が大学の運営にどんどん意見を出す「教職学」による大学運営の雰囲気が作れたら素晴らしいと思います。例えば、本学は今年60周年を迎えますので、学生に記念の年を盛り上げる企画を考えてほしいと思います。

■教員、剣道部の指導者としての40年で感じた大阪体育大学の特徴、良さは何でしょうか。

スポーツ活動は本学の大きな特徴で、7割以上の学生がクラブ活動に取り組んでいます。チームのため、またチームが一人のメンバーのために全力を尽くす精神が身についているのは素晴らしいことで、本学の学生は自分を高めようという努力をいとといません。また、大阪体育大学には、スポーツをする学生アスリートだけでなく、みる、ささえるなど、様々なかたちでスポーツに関心がある学生が集まっています。クラブに所属していない学生が、競技を通じて切磋琢磨している学生たちに影響を受けて成長していく点も、大きな特徴だと思います。

■クラブ活動のさらなる強化、スポーツ選手の育成についてどう考えますか。

40年の半分以上を、なりふり構わずクラブ指導に全力を挙げてきました。そういう経緯から、競技力向上委員長を務め、運動部活動改革プロジェクト、スポーツ局の立ち上げなどにも関わりました。クラブの指導者にはさらに今よりも上の高みを目指してほしい。一方で、全てのクラブが今すぐトップになれるわけではありません。学生の皆さんは、高みを目指して成長していく過程で、目標を達成することはもちろんですがそのクラブに所属して良かったという満足感や自分のクラブに対する誇りを感じてもらいたいと思います。

■剣道の魅力について。また、指導をしていて最も感慨深かったことは。

剣道は老若男女が取り組め、剣道で求められることは普遍性があり、日常生活に応用できます。指導をしていて一番うれしいのは、厳しい、苦しい稽古の結果として人間的に成長することです。そこにはまた部員の横や縦のつながりが確固としてできています。試合に勝つときには必ずと言っていいほど選手でない部員も含めて一体になっています。これは非常に心地よい瞬間で、一度それを体験すると、もう一度味わいたいとさらに指導にのめり込むようになったことを思い返します。

■少子化など大学を取り巻く環境が厳しさを増す中で、大阪体育大学の何を重視して大学運営に取り組まれますか。

大学での教育の大きな柱になるのは建学の精神です。「不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」。この先、「智・徳・体」を教育の柱に掲げていけば間違いはありません。「智」は単なる知識ではなく、物事の善悪をきちっと判断できる人間になること。「徳」は立派な人間になることで、大学の様々な場面における教育を通じて身に付けます。「体」はスポーツ活動そのものであり、健康であることです。「智・徳・体」のバランスの取れた人間形成を目指しながら教育を推進していけば、必ず社会に貢献できる人材を輩出することができます。

大阪体育大学第10代新学長

神崎 浩 Kanzaki Hiroshi

1960年生まれ。宮崎県出身。1985年、筑波大学体育研究科修士課程修了。同年大阪体育大学助手、2005年教授、2013年体育学部スポーツ教育学科長、2018年学長補佐、2021年体育学部長、2023年副学長。剣道部では1985年～2014年監督、2014年から総監督。2009年世界剣道選手権大会女子団体・個人で監督として優勝。2024年、最高位の称号である範士に。

OUHSスポーツキャンプ

地域の子供とクラブ生が交流

地域の子供たちを招いて、本学の学生らとともに様々なスポーツの体験を楽しんでもらおうという恒例のイベント「OUHSスポーツキャンプ」が3月1日、熊取キャンパスで開かれた。

まず、サッカー場で開会式が行われ、主催する本学社会貢献センターの中山健センター長（スポーツ科学部教授）が、「自分が興味を持てるスポーツと巡り合うきっかけにしてもらえれば」とあいさつした。

続いて、本学の体育館など、各スポーツ専用施設を会場に、スポーツの体験教室が繰り広げられた。

教室には、地域の子供たち約80人が参加し、サッカー、バスケットボール、剣道を体験するグループ、野球、バスケットボール、バレーボールを体験するグループの二手に分かれ、それぞれ3種目の競技を体験した。

子供たちはサポート役のクラブ生らとともに競技に取り組み、上達のコツなどを学びながら、それぞれの競技の面白さを知る機会にしていた。

中山健・社会貢献センター長

剣道

バスケットボール

野球

サッカー

バレーボール

旬な大体大生

岡村凜那（おかむら りんな）さん

スポーツ科学部２年・テニス部（※新学年）

鹿児島・鳳凰高校出身。2024年８月の全日本インカレシングルスで２勝。兄はテニス部女子監督の岡村修平講師。

目標はインカレシングルス優勝

昨年の全日本インカレシングルスでは、強力なサーブとストロークを武器に攻撃的なテニスを展開し、１年生ながら２勝した。「目標は全日本インカレ優勝」と言い切る２０２５年期待の選手だ。

鹿児島県出身。両親と３きょうだい全員がプレーするテニス一家で育ち、高校２年で、インターハイ団体全国３位、全国高校選抜大会個人ベスト６。高校３年の時、全日本ジュニア選手権ダブルスで準優勝した。

兄は、テニス部女子監督のスポーツ科学部・岡村修平講師。兄からゲームの組み立てなどを理論的に助言され、「ゲーム分析やバイオメカニクスなど体の動きが分かったら、テニスの幅が広がる」という思いから、大体大に進んだ。

昨年のインカレでは、優勝した関西大学選手に３回戦で敗れたが、「関西ＮＯ１の選手相手に粘ることができ、手応えを感じた」と話す。

２０２５年は「５月の関西学生春季トーナメントで優勝して勢いをつけ、８月のインカレに臨みたい」と飛躍を誓っている。

就活支援キャリアフェスタ

全２年生が内定４年生の体験談聴く

キャリア支援イベント「キャリアフェスタ」が２月７日、２年生に全員参加を義務付けて開催された。就活を勝ち抜いて夢をかなえて内定を得た４年生の体験談・アドバイスを聴く場だ。

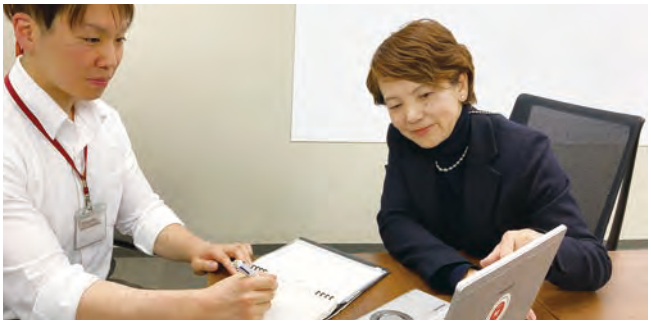
４年生28人が２人ずつ14教室に分かれ、進路を決めた理由・時期、学業・クラブとの両立、具体的な就職活動、後輩へのヒントや反省点などについて、午前・午後に計４回登壇した。４年生は「自分が２年生のころはコロナ禍の影響でこのような機会はなかった」「ラーニングコモンズ（学習支援室、チューター常駐のラウンジ）をめちゃめちゃ使った」などと話した。２年生は関心のある分野を中心に４教室で８人から体験談を聞き、課題を提出した。

大阪体育大学生の特質として、企業の人事担当者、教育現場の管理職などから「非認知能力」の高さがひんぱんに指摘される。「非認知能力」とは、点数や指標などで明確に認知できるものではないが、日常生活・社会活動で重要な影響を及ぼす能力で、コミュニケーション能力、リーダーシップ、粘り強さなどが挙げられる。

キャリアフェスタでも、静岡銀行に内定したサッカー部の伊藤颯汰さん（体育学部４年、浜松南）は「元気さやコミュニケーション能力など体大ブランドで周りと差別化できる」と強調。「内定者の懇親会に出席しても、他の学生と比べて体大生は一番明るいし、元気。学生のみんなが思っている以上に体大生の非認知能力は高い」と話していた。

東証プライム上場企業で0.8%の女性社長に

スポーツ経験がビジネスで活きる



フィットネス大手「ルネサンス」新社長

望月美佐緒さん

望月美佐緒（もちづき・みさお）
大阪府出身。1984年、大阪体育大学体育学部卒業。大学4年時にハンドボール部女子でインカレ準優勝。永新不動産「Doスポーツプラザ」にトレーナーとして入社し、1987年ルネサンス企画（現ルネサンス）へ。トレーナー・インストラクターを経て商品開発、人財育成などに携わり、2005年に執行役員、2019年常務執行役員、2022年取締役副社長。2025年4月1日、代表取締役社長。

フィットネス産業大手のルネサンス（本社東京都墨田区）の新社長に4月1日付けで、望月美佐緒副社長が就任した。同社は4月に子会社のスポーツオアシスに対して21回目となるM&Aを実施するなど積極的な経営を進める。一方で競泳五輪代表の池江璃花子選手らへの積極的なスポーツ支援で知られる。望月さんは大阪体育大学ハンドボール部女子出身。「スポーツでの経験はビジネスに非常に活きている」と語る。トレーナーとして業界に入り、東証プライム上場企業では0.8%しかいない女性社長に上り詰めた。

――新社長として注力する分野は。

私たちは「健康ソリューションカンパニー」になることを長期ビジョンに掲げています。コアは運動のノウハウやスキルですが、今はスポーツクラブに来られる方だけではなく、様々なチャネル、フィールドに事業を多角化しています。具体的には、企業・健康保険組合に向けた健康経営の領域や、自治体と連携した地域の健康づくり。例えば大阪府堺市・大浜体育館の運営などのPFI事業や介護予防教室、学校水泳などの受託事業です。さらに「元氣ジム」というブランドで展開しているリハビリ特化型のデイサービス事業や、4月にM&Aをするスポーツオアシスで伸びているホームフィットネス事業など、様々な分野に事業を拡大したいと考えています。

――競泳五輪代表の池江璃花子選手らアスリートの支援にも熱心だ。

池江さんは中学1年からルネサンスに通っていて、トップ選手の育成・支援は子どもたちの夢にもつながり、重要だと思っています。大阪国際がんセンター（大阪市中央区）の敷地内にがん患者の方の支援に特化したルネサンス運動支援センターがあり、池江選手は足を運んでくれました。白血病を克服して競技に復帰した池江さんは、健常者の人はもちろんがん患者の方にも勇気を与えています。

――大阪体育大学時代、ハンドボー

ル部で活躍された。なぜ大体大に進んだのか。

インターハイ予選で負けたことが契機になり、高校卒業後もハンドボールを続けようと進路を変更しました。ただ4年は長すぎるので、短大に進もうとも考えていたのですが、高校ハンドボール部の監督で五輪選手も育てた父から、「大学にハンドボールをしに行くだけなら意味がない。ハンドボールを通して人生を学ぶのだったら4年間が必要だ」と言われて、関西では強豪だった大体大に進みました。

大学の練習はとても厳しく、4年の時全日本インカレで準優勝しましたが、大体大に進んだことは人生でも一番の転機でした。人生で、自分の進路を自分で決めるという経験はとても重要です。道を選んだ以上は責任があり、結果を出すために努力しました。

――卒業後はトレーナーとして、フィットネス業界に進んだ。

4年生の12月まで試合があり、就職活動ができませんでした。ハンドボールは学生で終わりにするつもりで、好きだった運動を卒業後も楽しくできる方法はないかと考えていて、ご縁もあり、永新不動産の「Ｄｏｓポーツプラザ」に入社しました。

――3年後、ルネサンスに転職した。

体を壊して退職し、その後専門学校の講師をしていた頃、ご縁もあり、ホテルニューオータニ大阪のジムを運営していたルネサンスに入社しました。

――トレーナーを務めながら本部の経営にも関わった。

その後関東に転勤となりました。会社が6期連続で2けた成長し、ものすごい勢いで伸びた時代です。私たちは今回のオアシスで21回目のＭ＆Ａとなります。当時は、キッコーマン、日本たばこ（ＪＴ）、三菱地所、住友商事さんなど名だたる企業が子会社としてフィットネスクラブを持っていましたが、ご縁もありＭ＆Ａさせていただきました。会社が急成長し、各店舗で個別にやっていた事業を標準化しないとチームオペレーションができません。現場を知る私たちがスーパーバイザーとして現場でトレーナーをしながら標準化の役割を担いました。

――なぜ、トレーナーから社長に上り詰めることができたのか。

本当に運が大きかった。運とは、会社が伸びる時に働いてきたことと、そこで得た経験値です。また、亡くなった前社長が一から始めたヘルスケアの領域に10年前から関わりました。スポーツクラブをコアにしながら横の領域に健康ソリューションカンパニーとして広げていく役割を経験したことも大きかったと思います。

――大体大など体育大の学生はコミュニケーション能力、リーダーシップなど、社会での業務遂行、組織運営に必要な非認知能力が高いと、しばしば企業の人事担当者から指摘される。

大体大出身の社員は多く、一時期はうちの役員比率で大体大が一番多かった時期もありました。大体大出身で、コミュニケーション能力が低い人はあまりいませんね。サービス業として不可欠の資質ですが、本当にそう思います。

――学生時代のスポーツ経験はビジネスの現場で活きるか。

ハンドボールを続けるために大体大に進んだことが、人生で私の一番の転機です。何かにチャレンジすることはスポーツでは当たり前で、挫折から立ち直る力をスポーツで鍛えることはありますが、この力を社会に進んでから醸成することは意外に難しい。スポーツでの経験及びアスリートとして学んだことはビジネスと類似しています。例えば努力しないと勝てない（成果が出ない）。どんなに努力しても相手の方が強かったら負けます。一人で完結するビジネスはほとんどなく、チームの能力を引き出せるかどうかはすごく大きい。ハンドボールはコート7人、ベンチ7人ですが、その人たちだけでは勝てません。大体大ハンドボール部女子のインカレ11連覇がすごいのは、4年間試合に出なかった学生たちにも満足度や達成感があると感じることです。全員がそれぞれの役割を持ってやり切るチームは、すごく強いと思います。私は2年生でレギュラーになりましたが、けがをして、初めてチームを俯瞰してみることができました。相手チームの戦略をビデオで徹底的に分析する。練習で「ボールをいかに早く出すか」を追求する。そういう人たちの総合力でチームは強くなります。それはビジネスと同じです。

――大体大は２０２５年、開学60周年を迎えます。大体大生に向けて、先輩からメッセージを。

スポーツは、人との関わり方、努力することの大切さ、基礎の大切さなど社会を生きる上での大切なことがいっぱい学べます。しかも大学生の4年間は、本人は気づかないかもしれませんが、50代、60代から見れば気力も体力もあります。だから、どうぞ、出し惜しみをしないでください。やり切ることでしか見えてこないものがある。中途半端で止めるのではなく、その時にしかできないことをとことんやってみる。その経験はものすごく重要なことだと思います。

就職状況

公務員合格最多109人

企業からも高評価

2025年卒業予定者の就職活動が終了した。

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、採用面接試験はオンライン形式が多く導入された。コロナ収束後もオンライン形式での面接はあり、学生は柔軟にオンライン会議システムを使いこなして選考に挑んだ。対面に戻った採用面接試験も多く、キャリア支援センターでは、学生がどちらの方式にも対応できるように、オンライン形式、対面形式、双方の採用面接試験対策や講座の充実に努めた。

2024年度の公務員現役合格者数は、最多の109人（延べ）。内訳は、国家公務員（刑務官・自衛官・海上保安官）が13人、地方公務員（警察官・消防官・行政職）は96人。コロナ禍以降、さらに公務員人気が高まる中、キャリア支援センターとして公務員コース2期生たちへ「公務員革命」をスローガンに掲げ、学生たちが粘り強く取り組んだ成果が出た。

恒例の全学イベントである「キャリアフェスタ」も、今年度は対面開催を復活させることができた。

3年生対象のキャリアフェスタは8月に開催し、大手企業の人事担当者による講演を含め、2日間で全24の企業・団体に参画いただいた。1、2年生対象は2月に開催し、2年生対象のイベントでは、今年、内定、合格が決まった4年生28人が後輩に向けて熱く語った。また、1年生は「スポーツ界で実感する大体大の強み」をテーマに、日刊スポーツ新聞社スポーツ部・松本航氏（本学45期生）、「自分の得意とキャリアビジョン」をテーマに大阪府教育委員会保健体育課・庄司樹生氏（本学43期生）による特別講演を配信した。

キャリア支援センターの特徴の一つである「学内セミナー」は、本年も多くの企業団体の協力で、昼休みに説明会や業界研究をする学びの場として実施した。

近年、卒業予定者の約50％が企業等（企業、スポーツ関連、医療、福祉、自営業）に進み、高い就職率を残している。各企業から非認知能力の高い本学学生に対する評価は高く、本学の学生に対する期待も一層高まっていると感じる。

【キャリア支援センター】

教員採用試験

現役・既卒153人合格

さらなる早期化対策急務

2025年度採用（2024年度実施）の公立学校教員採用試験の現役合格者は、延べ54人となった。合格自治体は昨年度の24から28に広がった。また、既卒者99人（うち関西地区の自治体で72人）から合格報告があり、合わせて153人が合格した。合格校種も中学校、特別支援学校（支援学級含む）の合格者が6割を占めていた。

現役合格者の自治体の内訳は、大阪府9人、愛媛県7人、兵庫県4人、大阪市・鳥取県各3人、東京都・愛知県・滋賀県・広島県市・高知県各2人、堺市・豊能地区・神戸市・京都府・奈良県・和歌山・北海道・横浜市・石川県・岐阜県・浜松市・岡山県・岡山市・山口県・福井県・長崎県・熊本県・大分県各1人。北海道から九州まで例年同様、全国に合格者が広がっている。学校種別では、小学校（小中いきいき連携を含む）42人、中学校7人、中高1人、高等学校1人、特別支援学校3人となり、小学校での合格者が多かった。

昨年度から一部の自治体で導入されている3年生受験（一次試験もしくは一次試験の一部が受験可能）も今年度は実施する自治体が増え、本学でもチャレンジした学生のうち23人が合格となった。この23人は2025年度実施の一次試験もしくは一次試験の一部が免除となり、4年次での受験が軽減される。

文部科学省は2023年5月、2024年度実施の公立学校教員採用試験の第一次選考について、6月16日を基準日として各自治体に求める方針を示し、試験の早期化が始まった。さらに、2024年4月には、2025年度実施の教員採用一次試験の実施時期を5月11日を目安にできるだけ前倒しするよう再び各自治体に求めた。

また、民間企業をはじめ公務員試験でも幅広く導入されているSPI（基礎能力検査、性格検査）を第一次試験の一部の校種で取り入れたり、教職教養を廃止したり、小学校の二次試験における音楽実技や体育実技を廃止する自治体もあり、試験日程の早期化・複線化だけでなく、試験内容も変化している。今まで以上に教員採用選考試験の動向に注視し、早期からの対策が求められる。

教職支援センターでは、教員採用試験対策模試、各種支援講座、教職オンデマンド講座、全自治体の教採過去問貸し出し等の他に、校長経験のあるスタッフが面接指導だけでなく、教採への勉強の進め方や教職キャリアに関する相談にも対応して、学生一人ひとりに寄り添って採用試験受験に向けてのサポートをしている。

教員を目指す学生にとって、教員採用試験の合格はゴールではなくスタートである。教育現場は日々変化しているうえ、学校現場に出れば新人教員といえども「即戦力」として、役割を担っていかなければならない。教員の仕事は、そこに子どもがいてくれるので成立する。常に謙虚で真摯な気持ちで「学び続ける教員」になれるよう頑張ってもらいたい。

【教職支援センター】

令和7年度入試

激化する年内入試！志願者数が22％増！！

令和7年度入試は、前年度に誕生したスポーツ科学部の第2期生を迎える入試として実施された。

志願者数は、スポーツ科学部が1，125人（前年度比26％増）、教育学部は423人（14％増）となり、総志願数は1，548人（22％増）となった。

近年は入試の多様化を推進するために導入された「年内入試」が年々増加し、年明け以降の一般入試の受験生との二極化が進んでいる。

総合型選抜において、スポーツ科学部志願者数は266人（前年度比47％増）と大幅に増えた。その中でも入試制度『アスリート型』受験志願者数は61人（前年度比61％）となり、高い競技実績のある受験生が多く受験した。また『自己表現型』は資格や高等学校での活動実績を加点する制度を導入した入試制度で、スポーツ科学部は205人（前年度比40％増）、教育学部は73人（微増）の計278人が志願した。

学校推薦型選抜は、入試制度に3つの型があり、『小論文・面接他』『体力テスト・面接』『国語・調査書』と、様々な形態の試験を受験できる。スポーツ科学部志願者数は461人（前年度比32％増）、教育学部志願者数は209人（前年度比20％増）と両学部ともに志願者数が増加した。

また、年内入試が年々増加する中、年明けの一般選抜ではスポーツ科学部志願者数が189人（前年度比20％増）、教育学部は119人（前年度比7％増）という結果となった。

各大学で、定員割れを防ぐために年内入試で定員を確保する流れが加速している。本学も同様の方針で入学生の確保に向け、募集営業活動を強化し、高校訪問や高校ガイダンスを大幅に増やし、精力的に動いた。2026度入試に向けて、前年度以上の募集営業活動を設定し、更なる志願者増を目標に取り組んでいる。

【入試部】

＜スポーツ科学部＞※内部・指定校推薦を含む

入試制度	学科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
総合型選抜	スポーツ科学科	95	266	251	147
総合型選抜・後期	スポーツ科学科		8	8	1
スポーツ特別総合型選抜	スポーツ科学科	120	178	178	178
DASH アスリート特別総合型選抜	スポーツ科学科	5	4	4	4
卒業生子女型選抜	スポーツ科学科	－	16	15	15
学校推薦型選抜※	スポーツ科学科	200	461	455	250
一般選抜	スポーツ科学科	100	189	184	60
外国人選抜	スポーツ科学科	若干	3	3	0
合計	スポーツ科学科	520	1125	1098	655

＜教育学部＞※内部・指定校推薦を含む

入試制度	学科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
総合型選抜	教育学科	25	73	70	34
総合型選抜・後期	教育学科		6	6	2
スポーツ特別総合型選抜	教育学科	5	8	8	8
DASH アスリート特別総合型選抜	教育学科	－	1	1	1
卒業生子女型選抜	教育学科	－	7	7	7
学校推薦型選抜※	教育学科	50	209	207	131
一般選抜	教育学科	45	119	118	32
合計	教育学科	125	423	417	215

アナリスト養成講座

阪神、バレー日本代表が解説

スポーツ科学部は1月26日、「アナリスト養成講座」を昨年に続いて開講し、外部の方や学生ら約100人が受講した。

講座は、スポーツ科学部・沼田薫樹講師がファシリテーターを務め、まず、ゲームパフォーマンス分析が専門領域の岡村修平助教が、監督を務めるテニス部女子での活用事例を報告。続いて、元バレーボール男子日本代表アナリストの行武広貴さんが2008年の北京五輪から昨年のパリ五輪まで17年間のアナリスト活動について説明した。阪神タイガースチーム運営部アナリストの横山知紀さんは「突出した能力や感覚を持ったプロ選手をリスペクトし、プロ（感覚）に対してはプロとしての分析で応えることが重要」などと話した。

3人の講義に続き、バスケットボール部男子・竹下翔太さん（体育学部2年、西城陽）、同女子・中埜優さん（体育学部3年、香里ヌヴェール学院）、バレーボール部男子・酒井耀さん（体育学部3年、三田西陵）、同女子・宮内こころさん（体育学部3年、誠修）が各部のアナリスト活動について説明した。

学長特別表彰

世界と日本で活躍の２クラブ10選手

学長特別表彰式が1月23日に行われ、２０２４年度に国内外の競技大会で優秀な成績を収めた2クラブと10選手が表彰された。

表彰式では各団体と選手に表彰状などが手渡された。

続いて、原田宗彦学長が「皆さんの活躍は人生にとってとてもいい節目になるでしょうし、大学にとっても大きな功績です。後輩の皆さんはここに憧れの先輩がいるので、1年間研鑽に励み、先輩のように表彰されることをめざしてほしい」とあいさつし、学友会の大西優矢会長（体育学部3年、貝塚南）が「選手の皆様はたゆまぬ努力によってこの賞を得られました。これからの躍進と活躍を期待しています」とお祝いの言葉を述べた。

最後に受賞者を代表して、宇津木美都選手が「大学の４年間で二つの目標を立てました。１つ目のパラリンピック出場は、この大学に進学してしっかり練習に励めたから果たせたと思います。二つ目の目標の自己ベストは7年間更新できず苦しみましたが、この大学でいろんな人の支えのもとで更新できました。今後も練習に励み、もう一歩レベルの高い結果を残したい」とさらなる精進を誓った。

【団体】
ハンドボール部女子　全日本学生選手権大会優勝（11連覇）　　アダプテッド・スポーツ部　日本車椅子ハンドボール競技大会準優勝

【個人】

白石　美優（体育学部４年、福知山成美）	WBSC女子野球ワールドカップファイナルステージMVP・首位打者・ベストナイン
内田　峻介（教育学部４年、山口南総合支援）	パリパラリンピック・ボッチャ男子個人BC４出場
宇津木美都（教育学部４年、京都文教）	パリパラリンピック・水泳女子100㍍平泳ぎ（SB８）５位
北谷　宏人（教育学部４年、大塚）	世界デフ陸上競技選手権大会陸上男子棒高跳び銀メダル
荒瀬　　廉（体育学部４年、神戸国際大学附属）	男子ハンドボール世界選手権出場
冨部柚三子（大学院博士前期課程２年）	セーリング・ILCA級全日本選手権大会優勝（３連覇）
増田　優一（大学院博士前期課程１年）	全日本自転車競技選手権BMX レーシング男子エリート３位
田部壮一郎（体育学部４年、清風）	全日本学生体操競技選手権大会男子種目別つり輪優勝
石本　隼都（体育学部４年、日本航空石川）	全日本学生ボディビル選手権大会男子フィジーク176㌢超級優勝
唐門　　紘（教育学部３年、大阪体育大学浪商）	フォーミュラカイト全日本選手権男子優勝

大島鎌吉スポーツ賞

指導者４人に授与

本学学生のスポーツ指導に顕著な業績を残した指導者に贈られる大島鎌吉スポーツ賞の授与式が1月7日に行われた。功労賞を楠本繁生・スポーツ科学部教授（ハンドボール部女子監督）、浜上洋平・教育学部准教授（水上競技部女子監督）、横井光治・教育学部講師（硬式野球部女子監督）、奨励賞を藤原敏行・スポーツ科学部教授（体操競技部男子監督）が受けた。

この賞は本学の初代副学長で１９６４年東京五輪強化対策本部長・選手団長を務めた大島鎌吉氏の功績をたたえて本学が創立50周年を迎えた２０１５年に創設された。

昨年、楠本監督はハンドボール部女子が全日本学生選手権で11連覇。浜上監督はパリパラリンピックで宇津木美都選手（教育４年）が１００ｍ平泳ぎ（ＳＢ８）で5位入賞。横井監督は第９回ＷＢＳＣ女子野球ワールドカップファイナルステージで白石美優選手（体育４年）がＭＶＰ・首位打者・ベストナインを受賞。藤原監督は第78回全日本学生選手権で田部壮一郎選手（体育４年）が種目別つり輪で優勝した。

特別支援教育「教育講演会」

「多様な子がともに学べる体育授業とは」

昨年のパリパラリンピックなどパラスポーツが注目を集める中で、障害者の体育やスポーツが学校体育や地域でどう行われているのか、アダプテッド・スポーツの視点からどう工夫していけるのかを考える講演会が2月23日、開かれた。教育学部が地域公開講座「特別支援教育・教育講演会～障害児・者の正しい理解と適切な支援を行うために～」として、大阪府教育委員会の後援を得て開催し、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の教員ら教育関係者が参加した。

司会は、日本アダプテッド体育・スポーツ学会理事で、東京パラリンピックボッチャ日本代表コーチの曽根裕二准教授（アダプテッド・スポーツ）が務め、同学会理事の村上祐介・順天堂大学スポーツ健康科学部准教授が「ともに学ぶ体育授業の充実を目指して～アダプテッド・スポーツの視点から考える～」のテーマで講演した。

その後、第6体育館多目的アリーナで、本学卒業生の安田友紀・神戸女学院大学准教授が指導するインクルーシブなダンスグループ「Dance Assemble アマカマ・ドゥ」が創作ダンスを披露。実技実習では、聖カタリナ大学人間健康福祉学部健康スポーツ学科の今城遥助教が「アダプテッドの工夫について学ぶ」のテーマでバレーボールの授業について実践。兵庫県姫路市立水上小学校の萩原大河教諭が「インクルーシブな体育授業を創るヒント」として実践例を交えて説明した。

ICT活用し部活動指導

本学学生ソフトバンク社が報告会

ICTを活用した運動部活動指導の成果を発表する報告会が2月15日開かれ、自治体関係者や学校教員、学生ら約30人が参加した。

本学では、「グッドコーチ養成セミナー」で中学校などでの運動部活動指導にあたる学生を育成していて、自治体からの依頼を受け、本学の学生が部活動指導員などの立場で学校での指導にあたっている。2023年6月にソフトバンク株式会社とICT活用に関する連携協定を締結し、同社が開発した練習サポートアプリ「スマートコーチ」や「AIスマートコーチ」を活用した運動部活動指導の実証実験や実践モデルの開発に取り組んでいる。

報告会では、大阪府教育庁教育振興室保健体育課の中田将人首席指導主事が基調講話。ソフトバンク次世代育成推進課の佐藤誠さんが、ソフトバンクの産学連携プロジェクト活動について、全国で50団体以上がプロジェクトに加入していること、体育学部の折野歩菜さん（体育学部3年、神戸龍谷）がグッドコーチ養成セミナーの学校・地域への学生紹介システムを通じて、今年度57人がマッチングしたことなどを報告した。続いて、学校での運動部活動指導にあたっている本学の学生が、ICTを活用した指導の成果や課題などを発表し、学生らのディスカッションも行われた。

沖縄スポーツ展示会に出展

大学で唯一ブース、講演会も

スポーツ・レジャー設備・サービスの総合展示会「レジャー&スポーツジャパン 2025 in Okinawa」が2月20、21日、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで開かれ、本学は大学として唯一、ブースを出展した。

原田宗彦学長は、同時開催の第13回スポーツツーリズム・コンベンション in 沖縄を主催する日本スポーツツーリズム推進機構（JSTA）代表理事を務める。オープニングセレモニーでは、原田学長が主催者を代表してあいさつした。

大体大のブースでは、「大体大 連携力 エビデンス創出力」を壁面にメッセージとして打ち出し、大体大が全国に先駆けて進める運動部活動改革プロジェクト、オンラインと長期履修制度を組み合わせて遠隔地の社会人が多数学ぶ大学院スポーツ科学研究科などを説明。ブースにはビジネスパーソンら約100人が訪れ、教職員らが説明していた。

21日には、本学主催セミナー「産学連携による運動部活動改革の挑戦：大学が描く未来のスポーツエコシステム」が開催され、藤本淳也教授、土屋裕睦教授、スポーツ局の河島晋太郎統括ディレクターが講演した。

学生”夢“プロジェクト

採択3チームが活動報告

「学生”夢“プロジェクト」の報告会が2月27日に行われた。

「学生”夢“プロジェクト」は、学生が主体となって企画・実行するプロジェクトを大学が助成金を支出して支援する取り組み。申請があったプロジェクトから学生によるプレゼンを経て3件が採択された。学生の積極的な社会参画を図り、優れたリーダー性、高い実行力、協調性を培うことが狙いだ。

最初に体育学部3年の田中良ゼミの学生3人が「子供たちに健康届けたい！」と題したプロジェクトを報告した。発表者は出葉丈樹（体育学部4年、脇町）、田中結芽（同、比叡山）、松岡哲平（体育学部3年、桜宮）さん。徳島県美馬市の小学校で実施した講演やスポーツイベントについて説明した。

池島明子ゼミの高橋直樹さん（体育学部3年、履正社）は「フードロスを無くそう！もっと身近に」を報告しました。地元の熊取町の農家グループから不ぞろいで売れない野菜を格安で購入し、カレーを作って大学祭「雨山祭」で販売、フェアトレードやフードロスについてアンケートした内容などについて説明した。

藤本ゼミの福永晴翔さん（体育学部3年、市立函館）は「硬式野球部廃棄バット再利用」として、折れたバットを箸として再生する活動を報告した。

窓

◆◇「学歌斉唱」。修了式・卒業式のフィナーレで、司会者がアナウンスしました。「この6年間、コロナ対策で学歌は清聴にとどめていましたが、令和では初、6年ぶりの学歌斉唱です。思いを込めて斉唱してください」。卒業生、教職員が起立し、大きな声で学歌を歌いました。コロナ禍で全面中止など様々な制限を受けてきた卒業式が、ようやくコロナ前の本来の姿に戻った瞬間です。

◆◇「金色（こんじき）の波頭きらめく 難波の海に 若人の理想 いま溢（あふ）る 学びし窓に谺（こだま）した 輝く日々よ 我らに宿る 大阪体育大学 栄えあれ」。学歌は1989年の熊取キャンパス移転に伴い、新しく作られました。作詞は後藤正治さん。『牙―江夏豊とその時代』などスポーツ関係の著書も多い日本を代表するノンフィクション作家です。野田賢治理事長によると、新聞社出身の教員の紹介が縁で引き受けていただき、素晴らしい学歌になりました。

◆◇友人とともに歌う当たり前のことが元に戻るまで、5年かかりました。コロナ禍で私たちは多くの苦しみを経験しましたが、一方で当たり前の日常のありがたさ、尊さを再認識しました。新年度も大いに友と接し、歌い、語らって、学生生活を充実させてほしいと願います。

【大坪康巳】

わかりあえないことが当たり前

コラム ボーシャー

名誉教授　和田隆夫

先日、妻が花を買った。持ち帰り用のビニール袋は５円だった。

しばらくして実家を訪れた際、庭の花を摘んできた。そのとき、先のビニール袋を再利用していた。

妻は楽しそうに言った。

「あと３回使えば20円得よ」

妻の頭の中は、５円の袋を５回使うので25円分の価値がある。それが５円で済むから20円得になる、という計算だ。

そんな妻に、つい言ってしまった。

「５回使うんだったら、１回あたり１円だな」

私の頭の中で、５円の袋を５回使うことで、１回あたりのコストが１円に抑えられる、という計算だった。

このとき、私たちの間に「思考の溝」があると感じた。しかし、その溝の正体ははっきりせず、モヤモヤしていた。

そうだ。こんなときこそChatGPTに尋ねてみよう。

ChatGPTに尋ねてみたところ、妻は「あと何回使えばお得になるかを考え、行動の動機づけにつなげる」タイプで、実用・現実的な思考をするらしい。

一方、私は「全体のコスト感や１回ごとの価値に着目して、長期的な平均値を考える」タイプで、トータルコスト思考らしい。

この分析で、これは「思考の溝」ではなく、二人の視線が180度違うとわかった。つまり背中合わせの夫婦ということになる。

そんなことを考えていると、昨年読了した、今井むつみ『学力喪失』（岩波新書）を思い出した。同書は認知科学を基礎にして「生きた知識」について論じている。

認知科学には「スキーマ」という概念がある。簡単に言えば、経験を通じて無意識に形成される思考の枠組みのことである。

例えば「Aは化粧品を買った」と聞けば、多くの人は「Aは化粧品の所有者になった」「Aは代金を支払った」「Aのお金が減った」などを推測する。他人が同じ推測をするのは、その時、同じスキーマを持っているからである。これからわかるように、会話が噛み合って、お互いに理解できるためにはスキーマがどこまで会話の相手と同調できているのかがポイントになる。

スキーマがずれると、会話の前提が噛み合わなくなる。いい例が、エスノメソドロジーの論文で紹介されている。

エスノメソドロジーは、H・ガーフィンケルが創始した学問領域である。この研究は、日常生活の秩序が混乱する原因の一つが、会話の前提の違いにあることを明らかにしている。ある夫婦の会話を紹介する（H・ガーフィンケル他『日常性の解剖学』（ちくま学芸文庫）会話は筆者が短く改変）。

夫「今日、ダナは自分でパーキング・メーターにコインを入れたよ」
（夫は息子が成長したことを喜んで言った）

妻「レコード店に寄ったの？」
（妻は、夫の喜びに気づかず、駐車したことから、寄り道を推測した）

夫「いや、靴屋に行ったんだ」
（実はレコード店にも寄っている）

妻「どうして？」
（妻は、靴屋に寄ったなら運動靴のかかとを直したのかと推測する）

夫「新しい靴ひもを買ったんだ」
（夫は、妻が靴ひもの切れていたことを知っていると思っている）

妻「あなたのローファーのかかと、新しくしないと」
（妻は、かかとを直すべきと考えている）

会話はまったく噛み合っていない。理由は、発語の前提がずれているからである。スキーマの異なることがわかる。

「表現とは、他者を必要とする」（平田オリザ『わかりあえないことからコミュニケーション能力とは何か』（講談社現代新書））というフレーズがある。

この言葉の「他者」には、スキーマが同じ人と異なる人がいる。スキーマの同じ他者は「仲間」や「気の合う人」だ。初めて会った人でも仲良く時間を共有できるだろう。

しかし、スキーマが違うとどうなるか？

ここでエスノメソドロジーの実験を紹介する。Aは被験者、Bは実験者である。ドッキリカメラ的要素が強い実験で、Bがいわゆる仕掛け人である。

AとBが友人Cの横柄な態度に悩んでいることを話題にした会話の一部である。

A「（Cには）むかむかするぜ」

B「どこか悪くてむかつくのか、説明してくれよ？」

A「冗談だろう？おれの言いたいことはわかっているくせに」

B「だから、お前の病気を説明してくれ」

A「どうしたんだい？こんなふうに話をしたことはなかったぜ。そうだろう？」

Aの「むかむかする」は比喩なのに、Bは、Aの言葉を比喩ではなく、額面通りに受け取ることで、通常の会話の暗黙の前提（スキーマ）を崩し、そのため二人の会話は進まなくなっている。

こんなことを同僚と酒を飲みながら上司の悪口を言っている場面でやれば、次から飲みに誘ってもらえない。このようにスキーマがずれると、会話は続かない。

「空気を読め」という言葉がある。この言葉は、そうすると「スキーマを共有する」に近い表現に思える。昔から日本人はこのことを理解している民族なのかもしれない。ただしこれが同調圧力となると事情が変わってくる。この点が私たちの問題である。

日本では、暗黙の了解や察し合いが重視されてきたため、スキーマの共有が円滑なコミュニケーションの要となっている。しかし、経験で言えば、いくら会話をしても、「伝わらない」ことがある。このとき相手のスキーマとの違いに素早く気づき、対応できる術を持つべきだと思う。これを「表と裏を使い分けている」と批判するのは間違っている。とりわけ現代のようにグローバル化が進み、多様なスキーマの存在が前提とされる時代は、こうした相互理解を深める力が求められているのである。

そこでスキーマの違いを知り対応できるようになるためにはどうすればいいのか。「自分と価値観やライフスタイルの違う「他者」と接触する機会を、シャワーを浴びるように増やしていかなければならない。」（平田オリザ、同書）という指摘がある。

「わかりあえない」ことは悪いだけではない。「わかりあえない」ことを互いに理解すれば、むしろ新しい視点やアイデアが生まれる可能性がある。夫婦や家族に限らず、異なるバックグラウンドを持つ人々が共存する社会では、「わかりあえない」ことを乗り越える努力だけではなく、「わかりあえないこと」を活用する視点が求められている。

繰り返しになるが、私たちは、「伝わらない」ことに苛立ったり、あるいはスキーマの違いに困惑したりして、二者択一で正誤を判断することはやめた方がいい。そうでないと、混乱はいつまでも絶えないだろう。

異なるスキーマを持つ人間が、同じ空間で生活するという事実こそ、これからの家族や社会のあり方の問題解決に連なっていく。

ところで件のビニール袋は今もわが家にあり、妻に確認したところ７回利用したそうだ。相変わらず私は、１回あたり１円を切ったと計算するし、妻は30円得をしたと嬉しそうにしている。ただ私も、この頃、30円得するのも悪くないと思うようになった。

本物を学び、極める

大阪体育大学

【大学院】
●スポーツ科学研究科
　博士（前期・後期）課程

【スポーツ科学部】（1年～2年）
●スポーツ科学科

【体育学部】（3～4年）
●スポーツ教育学科
●健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】
●教育学科

大学事務局
庶務部、教学部、入試部、広報室
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設等
図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター
国際交流センター、学習支援室

https://www.ouhs.jp/

OUHS ジャーナル　2025 年（令和 7 年）4 月 1 日（火）
発行所：**大阪体育大学**　広報室　発行責任者 大坪康巳　協力：教育後援会・学友会
大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1　電話（072）453-7021　FAX（072）453-8818